ファルカオＦＣ久喜

ファルカオフットボールクラブ
２０２２年度活動報告書

スポーツベース
ファルカオ

クラブリーグA昇格

2018年より設立されたジュニアユース。今年度に行われた「高円宮杯JFA U-15サッカーリーグ2022埼玉 クラブリーグB-Ⅱ」にて見事に優勝を果たし、クラブリーグAへの昇格を決めました。

久喜総合運動公園多目的広場で行われた首位決戦では、チーム一丸となって相手の猛攻を防ぎ、後半、カウンターから豪快なミドルシュートでゴールネットを揺らすという劇的な試合展開で勝利を収めました。ホームでの開催となったこの試合では保護者をはじめ多くの方が観戦に訪れ、選手たちは、そこにいた全ての人が感動するような素晴らしい試合を繰り広げてくれました。

2023年度からは一つ上のカテゴリーでリーグ戦を戦います。厳しい戦いになりますが、選手、スタッフ一同、全員で戦い抜きます。

U-14選手権　ベスト16進出

中学2年生以下の選手で構成されたチームで行われる「埼玉県クラブユース（U-14）サッカー選手権大会」。昨年度のU-13選手権大会での結果により所属するグループ（A～Cグループ）が決定しますが、ファルカオは2年連続で予選を突破し、決勝トーナメント2回戦へと進出しているためAグループに所属しています。グループリーグでは、県内屈指の強豪チームが名を連ねる中、3位（5チーム中）という結果で終えました。この学年の特徴でもある堅い守備で、全試合で複数失点をすることはありませんでした。そして12月から行われた決勝トーナメントでも、強豪チームを相手に堂々と戦い抜き、ベスト16という結果を収めることができました。

新人戦　決勝T進出

小学生年代の公式戦「2022年度埼玉県第4種サッカーリーグ戦」が2022年4月から9月にかけて行われました。

埼玉県東部北地区に属するファルカオは、今年度は5位（9チーム中）という結果で4種リーグを終えました。2年連続の県大会出場とはならず、悔しい結果になりましたが、試合を重ねていくうちに、子どもたちは、選手としても人としても成長してくれました。その姿はジュニアユースでの活躍を十分に期待させてくれるものでした。

また次年度のファルカオを背負うメンバーが新人戦に挑み、東部北ブロックで決勝トーナメント進出を果たしました。惜しくも初戦敗退となりましたが、子どもたちの可能性を感じることができた試合となりました。

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

子どもの居場所づくり

子供の居場所とは、「家でも学校でもなく、子どもたちが安心して過ごせる居場所と思えるような場所」のことです。「こうあるべき」といった固定概念はなく、運営者の創意工夫により多様な形で展開されているのが特徴です。

ファルカオスポーツベースは、学校がある日の平日・火～金曜日の放課後に、スポーツができる子どもの居場所として運営しています。わたしたちスポーツクラブの持つ強みを生かし、「子どものためのスポーツ基地」を標榜し、子どもたちがスポーツ指導者と触れ合いながら遊ぶことができる全国的にも珍しい形態の子どもの居場所です。また、管理栄養士を配置しており、安心・安全な食の提供を心がけています。

学校も学年も違う子どもたちが集まっていますが、一緒に体を動かしているとすぐに仲良くなることができるのも、スポーツの持つチカラ。これからもスポーツのチカラを最大限に活用した取り組みを展開していく予定です。

施設開放イベント

地域の方との触れ合いを大切にするために、週末を活用し、定期的にイベントを行っています。これまで、ハロウィンやクリスマス会などの季節イベントを開催したほか、「ファルカオスポーツベース開放デー」と題して、室内運動スペースを子どもたちに開放するとともに、子ども食堂を同時開催して、地域の子どもたちに豊かなスポーツ体験と、暖かい食事を提供してきました。

毎回、100人以上（多いときは300人！）の子どもたちが集まってくれ、少しづつ子どもたちの笑顔が溢れる空間になってきました。これからも定期的にイベントを開催しながら、地域に根ざした活動を行ってまいります。

メディア出演・掲載

ファルカオスポーツベースの活動の独自性に注目していただき、NHKをはじめとする多くのメディアが取材に来てくださっています。メディアに取り上げていただくことにより、スタッフも気が引き締まりますし、一緒に出演する子どもたちにとっても、貴重な体験を積むことができております。

またわたしたちの活動が評価され、日本財団が主催する「HEROs AWARD 2022」に招待していただきました。ファルカオスポーツベースの開所式にも駆けつけてくれた元サッカー日本代表の巻誠一郎氏らとも再会。この表彰式で名だたるアスリートらとご一緒させていただいた代表の瀬川は「改めてスポーツクラブが持つチカラを活用して地域社会をより良いものにしていきたい」と語っています。これからも、同じ志を持つスタッフで力を合わせ、スポーツを活用して社会に貢献し、地域にとって必要とされるスポーツクラブになることを目指してまいります。

ファルカオ　専任スタッフの紹介

ファルカオのスタッフたちの特徴は「若さ」と「専門性」。スポーツに関する専門的な知識と経験を生かしつつ、子どもと近い距離で接しながら、自己表現を促し、豊かなスポーツ体験を提供しています。

瀬川泰祐(せがわたいすけ)　／　代表

高校1年のときに、県リーグ２部に所属する社会人クラブでサッカーを始める。大学卒業後にライブエンターテイメント業界に就職し、Ｊリーグクラブやプロ野球球団の運営に携わる。その経験をもとに久喜市のシンボルとなるクラブをつくるべく、大久保とともにファルカオを設立。長らくアドバイザーとしてクラブを後方から支援していたが、2020年にコロナ禍でクラブが存続の危機に陥いると、窮地を救うために代表に就任。運営方針を見直しつつ、スポーツDXへの取り組みや、ファルカオスポーツベースの開設などを行い、クラブの改革を推し進めている。

大久保翼(おおくぼつばさ)　／　ジュニアユース監督

選手歴：旧久喜グリーンサッカークラブ～久喜東中学校～ 青森山田高校～国士舘大学～アミティエSC京都～バンディオンセ加古川～さいたまSC～つくばFC～さいたまSC

高校生のときに世代別の日本代表に選出される。大学卒業後は関西人リーグ、関東リーグなどでプレー。2016年に瀬川と共同でクラブを設立しその礎を築く。現在はジュニアユース監督を務めるほか、私立高校サッカー部のコーチとしても活動中。

日高貴裕(ひだかたかひろ)　／　ジュニア監督

選手歴：新曽FC～新曽中学校～流通経済大学付属柏高校～上布田蹴球団～さいたまSC～Fernhill FC(オーストラリア1部)～SGE Mendig(ドイツ6部)～TSV1973四日市～つくばFC

大学時代より関東リーグでプレーし、国体の舞台も経験。2018年には海外へ渡り、ドイツなどでプレーした。その後再び日本の社会人リーグへと活躍の場を移し、つくばFCなどで活躍。選手としての視点と感覚を子どもたちへ伝えるべく奮闘中。

佐藤和希(さとうかずき)　／　GKコーチ

大利根サッカースポーツ少年団～大利根中学校～春日部東高校～さいたまSCセカンド～さいたまSC～タウィーワッタナ・サムットサコン・ユナイテッドFC（タイ３部）

高校卒業後、埼玉県リーグ、関東リーグでプレー。大学４年生のときに、タイへ渡りトライアウトに合格し、プロ契約を勝ち取る。2020年に現役を引退後、ファルカオFC久喜でGKコーチとして指導者のキャリアを本格的にスタート。地域のGK環境をより良くするために活動中。

瀬川理奈(せがわりな)　／　管理栄養士

幼い頃より食に高い関心を持ち、専門学校を卒業後には管理栄養士として病院に勤務し患者の栄養士指導を行う。その後、幼稚園・保育園に勤務しながら、子どもの食育に関する知識と実践力を身につける。2022年に独立し、現在はファルカオスポーツベースに常駐。子どもたちに安心・安全な食の提供を行っている。またスポーツ栄養学にも精通し、ファルカオのオリジナルプロテイン「POTENZA（ポテンザ）」を監修するなど、その高い専門性を発揮している。

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

そこにファルカオがある、ということ

埼玉県久喜市。冬のグラウンドに、子どもたちの元気な声が響きわたる。太陽の光に照らされた子どもたちの笑顔は、まるで宝石のように輝いていた。

久喜市で活動するファルカオFC久喜（以下、ファルカオ）は2016年創立の新進気鋭のサッカークラブだ。スポーツ界に幅広い人脈を持つ瀬川泰祐氏と、かつて世代別の代表に選ばれた経験を持つ大久保翼氏が発起人となって設立されたクラブは、瞬く間に地域住民からの支持を得た。デジタル活用など独自の取り組みが多くのメディアで取り上げられ、いまでは150名を超える子どもたちが集まるスポーツクラブに成長した。ファルカオは、なぜ短期間のうちにここまで成長できたのだろうか。その秘密はこのクラブの創設時に作られたコンセプトにあった。

ファルカオが始動した2016年ごろは、スポーツ指導者のパワハラ問題などが相次ぎ、草の根のスポーツ界は大きな転換期を迎えていた。一部の有識者たちにより、地域のサッカー環境を変えようと活発に意見の交換が行われ始めていた。

「子どものためのスポーツ環境とは何か？」

「コーチたちが子どもたちに唯一与えることができるのが言葉。言葉を大切にできるコーチたちとともに、子どもたちのためのスポーツ環境を作っていきたい」。

今日も久喜市のグラウンドには、クラブのコンセプトを体現すべく、子どもの背中を押すコーチたちの声が響く。声のシャワーが子どもたちに勇気を与える。そしていつか、豊かな言葉のシャワーを受けた子どもたちが、このグラウンドから世界へ羽ばたいていくのだろう。

そこにファルカオというスポーツクラブがあること。その価値はいま、久喜市にしっかりと根付こうとしている。

頭の中に浮かんだこの命題の答えを求め、瀬川氏は、参考になるスポーツクラブがないかを徹底的に調査した。北は北海道、南は九州まで多くのチームの現場に足を運び、数十ものクラブを視察した。そこで出会ったのが「フウガドールすみだ（以下、フウガ）」だった。フウガは日本最高峰のフットサルリーグ「Fリーグ」に所属するフットサルクラブだ。トップチームから小学生年代まで、幅広くフットサル事業を展開している。そのフウガの育成コンセプトを調べてみると「楽しみながら上手くなる」「感情をストレートに表現する」といった、ファルカオのコンセプトと共通する言葉が見つかることがわかる。

こうして入念な調査とコンセプト設計の元、「子どもたちが自由に感情を表現できるサッカークラブを久喜市につくろう」と考えて設立されたのがファルカオフットボールクラブだ。

瀬川氏はそのコンセプトを実現するためには「言葉」が大切だという。

スポーツの枠を超えて

　ファルカオスポーツベースは、かつて農産物直売所として地域に親しまれていた建物をリノベーションして再生した、子どものためのスポーツ施設だ。リノベーションにあたっては、日本財団から約5,300万円もの資金を調達して実現したという。片田舎の小さなサッカークラブが、どのようにしてこれだけの巨額の資金を調達し、どんなプロセスを経て事業開始までこぎつけたのか。その道のりを代表の瀬川泰祐氏に伺った。

――ファルカオスポーツベースを開設することになったきっかけを教えてください。

（瀬川）　わたしたちが活動する久喜市も少子化が進み、サッカー人口も年々減少しています。厳しい事業環境の中、地域の方々に選んでもらえるスポーツクラブになるためには、どんな活動が必要なのかを常に考えていました。そんな最中に、新型コロナウィルスが大流行しました。毎日の練習で使わせてもらっている公共施設が使用禁止になり、わたしたちは活動停止を余儀なくされ、一瞬で存続の危機に陥りました。その時に感じたのは、「もっとエッセンシャルな領域で事業を行わなければ、わたしたちは必要とされなくなってしまう」という危機感でした。そこで自分たちが持つ強みを分析し、どの領域で強みを活かすことができるかを必死に考えました。その結果、教育や児童福祉の分野がもっとも相性が良いと気づき、事業の構想がスタートしました。

――さまざまな事業形態がある中で、なぜ子どもの居場所を選択したのでしょうか？

（瀬川）　日本財団とのご縁があったのが大きかったです。わたしは新型コロナウイルスの流行が始まった当時は、日本財団が主催する「HEROs Sportsmanship for the future（以下、HEROs）」のオフィシャルライターとしても活動していたんです。アスリートらとともに被災地を巡ったり、AEDの普及活動に同行したりしながら、彼らの活動を世に広く伝える役割を担っていました。しかし徐々に書くだけでは満足できなくなっていったんです。せっかく国内外の最先端のソーシャルアクションに触れているのだから、そこで得た知見を自分の住む久喜市に持ち帰り、地域をより良いものにするためにアクションを起こしたいと思うようになりました。そんな時に、HEROsのプロジェクトリーダーの方がSNSに投稿した「子ども第三の居場所」の事業者募集の情報を見て、「これだ！」と直感し、事業に応募することを決意しました。

――その後、どのように構想が進んだのでしょうか？

（瀬川）　この事業の構想の始まりは、スポーツ指導者の活躍の場を増やそうとしたことでした。スポーツ界には、指導者が流出してしまうという大きな課題があります。日本のスポーツは、学校体育に組み込まれてきた歴史があるため、お金を支払ってスポーツをするという文化がありません。このため地域スポーツは産業化が進まず、ある程度の年齢になると指導者が辞めてしまうという課題があるんです。せっかく指導ノウハウを身につけ、さあこれからという時期に、有能な人材がスポーツ界から離れてしまうのは、業界全体にとって大きな損失です。逆にこの損失を食い止め、持続的に質の高いスポーツ環境を提供し続けることができれば、地域の子育て環境の充実にも貢献できると考えました。
　とはいえ、スポーツ指導者が食べていくためには２つしか方法がありません。一つはスポーツクラブの会費を高くすること。もう一つは別の事業で収入を得ること。前者をとると、スポーツをする人口自体が減ってしまうことになりかねないので、わたしたちは後者を選択することにしました。つまりスポーツ指導者が活躍できる別の場所を自ら作り出そうと考えたんです。また、ファルカオの育成方針にそった指導者なら、子どもたちの自己肯定感を育むような接し方ができると確信し、この事業を組み立てていきました。

――発想が素晴らしいですね。他にもファルカオスポーツベースは、空き家問題にも取り組んでいると伺いました。

（瀬川）　元々は農産物直売所として、地域に愛されていた場所でした。でも、小学校の目の前という好立地にも関わらず、十数年前から空き家となっていたんです。その土地と建物を子どもの居場所として再利用することができれば、地域の子育て環境の充実にもつながるし、ファルカオを卒団したクラブ生が、いずれ大きくなって高校生や大学生になったときに、この地域に戻ってくる場所になるんじゃないかと思ったんです。わたしは、小学生の子どもを指導していた頃、卒業する子どもたちに「いつでも戻ってこいよ」と言ったことがありました。でも、それは社交辞令

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

だったことに気づきました。子どもが大きくなった時には、そこは違う人が使う場所になっていたり、当時いた人がもういなくなっていたりして、結局、子どもたちが戻ってこられる場所なかったんです。そんな場所をいつか作りたいと思っていたので、「立地条件もストーリー性もピッタリ当てはまる場所はここしかない！」と思い、すぐに日本財団に提案しました。担当の方も非常に気に入ってくれて、話がトントン拍子に進んでいきました。

――どれくらいの期間でオープンに漕ぎ着けたのでしょうか。

（瀬川）　実質的には、動き出してからはたったの10ヶ月ほどでした。これほどの短期間で事業を進めることができたのが、自分でも本当に不思議で、何かに導かれるように、パズルのピースが次々とハマっていく感覚でした。本当にたくさんの方々と密にコミュニケーションをとらせていただきながら進めたのですが、出会いが一つでも欠けていたら、ファルカオスポーツベースはできていなかったと思います。

――苦労したことや報われたと思ったことはありますか。

（瀬川）　ゼロから事業を立ち上げ、それを軌道に乗せるまでは、やはり大変でした。でも久喜市の子育て環境を整える一助になれたという点では、誇らしく思っています。もちろんまだまだこれからですが（笑）。もう一つは、地域の事業者の方々とともに施設を作ることにより、地域経済に貢献することができたという経験は、何にも変えがたい喜びでした。ある試算によれば地域に数千万円の経済効果をもたらすことができたそうです。

――スポーツクラブがそれだけ地域に貢献している事例は全国的にも珍しいですよね。

（瀬川）いまわたしたちは、スポーツの枠を越えて、地域の課題解決に目を向けています。例えば、ファルカオスポーツベースがある南栗橋地区は、東日本大震災の時に液状化現象が発生し、家屋の倒壊が起きました。

また令和２年台風19号の際には、利根川が氾濫警戒水域を越えたため避難勧告が出されました。そのような土地柄のため、地域住民の方の防災に対する意識が非常に高いのが特徴です。そこでわたしたちにできることはないかと模索したところ、アウトドアブランド「KEEN」が災害時のパートナーを募集していたんです。すぐに応募したところ、協定を結ぶことができました。この先、もしも久喜市で避難生活を余儀なくされることになった際には、ファルカオを通じて、足元の安全を確保するためのサンダルを提供することができるんです。わたしたちのような小さなスポーツクラブでも、スポーツの枠を越えて地域課題に目を向けることができれば、解決できることがまだまだあるはずです。

――地域の方の共感を呼び、応援されるスポーツクラブは強いですよね。

（瀬川）　近年はコロナ禍で、行き場を失う子どもが増えています。ファルカオスポーツベースでは、誰もがスポーツを楽しむボーダレスな世界観を作り、力みすぎることなく、楽しく体を動かせる居場所を子どもたちに提供しながら、広く地域住民の方の役に立ちたいです。地域コミュニティの喪失が叫ばれて久しいですが、今後はますます趣味や嗜好を同じくする生きたコミュニティが重要になるはずです。ファルカオスポーツベースがある南栗橋地区は、いままさに新しいまちづくりが進んでいますので、ファルカオスポーツベースを若い世代のコミュニティ拠点にしながら、スポーツクラブとしての価値を高めていくことをイメージしています。そして、スポーツの枠を超え、地域から必要とされるスポーツクラブになっていきたいですね。

瀬川泰祐(せがわたいすけ)プロフィール

久喜市在住の編集者・ライター。（一社）ファルカオフットボールクラブ代表理事、（株）カタル代表取締役、（一社）世界こどもワクチン基金理事。Yahoo!ニュース個人オーサー。これまでHEROs公式スポーツライターやアスリートライブ編集長を歴任。現在もスポーツや医療の分野を中心に、数多くのメディアで執筆中。ライブエンタメ業界やWEB業界で数多くのシステムプロジェクトに参画してサービスをローンチした経験を活かし、現在も多くのプロジェクトに参画中。「行動は動機を強化する」をモットーとし、常にアクションを起こし続けることを大切にしている。2022年4月に久喜市議会議員一般選挙に初挑戦し当選。

データは何を証明するのか？

ファルカオフットボールクラブ（以下、ファルカオ）では、2020年よりGPSウェアラブルデバイスを導入し、選手たちの走行距離やスプリント回数、心拍数などを計測している。このGPSデバイスは、サッカー元日本代表の本田圭佑選手が発案したサービスで、Jリーグクラブはもちろんのこと、全国高校サッカー選手権大会に出場するような強豪チームでも導入されており、サッカー界で注目されているデバイスだ。

小さな街のサッカークラブ経営は、決してラクなはずはない。それでもこのような計測デバイスを導入したのは、選手たちの成長を第一に考えたからだ。ファルカオでは、主役は選手たちにあると考えており、「目の前の勝利」よりも「選手の育成」に重きを置いて指導にあたっている。

もちろんサッカーというスポーツである以上、選手たちが目の前の勝利を追求することから逃げてはいけないが、指導者や周囲の大人が勝利を追求し出すと、身体的な成長が早い選手だけを優先した選手起用になってしまうことがある。これでは成長が遅い選手たちの才能は埋もれ、身体能力に優れた選手たちは、身体能力に頼ったプレーに偏ってしまうだろう。身体的な差が埋まる高校生年代で成長が止まってしまうどころか、それまでの自信やプライドは引き裂かれ、非行に走ってしまったり、引きこもったりしてしまうケースもある。このような不幸を無くすためにも、選手たちがその年代で身につけておくべき技術や判断力を養い、身体的な成長の差が埋まる高校生年代で、それまで蓄えた力を存分に発揮してもらうことを目的として選手たちを育成をしている。

体が小さく足も遅い　そんな選手の変化

そんな育成ポリシーが正しいということに気づかせてくれた選手がいる。ファルカオに所属するサトシ（仮称）はプロレス好きの中学３年生。身長は小さく、少しだけポッチャリしていて、時折優しそうな笑顔を見せるどこにでもいそうな中学生だ。

ピッチで走っているサトシはお世辞にも足が速いとは言えない。表情も飄々としていて、一生懸命にプレーしているようには見えない。ボールを奪いに行くが、あと１～２歩のところで、相手選手によりボールはサトシから遠いところに転がっていった。「あと１歩なんだよなぁ」とわたしが呟くと、監督の大久保は私の耳元でこう話した。

「ある時に、気づいたんです。“サトシ、さっきあそこにいたのに、もうここにいるじゃん”って。そう感じる場面がどんどん増えていきました。サトシは一人では局面を打開することはできないんですけど、周りの選手をめっちゃ助けていることに気づきました」。

もう一度、ピッチ上のサトシに目をやる。サトシが追いかけても奪いきれなかったボールは、次の瞬間、違う選手が奪っていた。チームとしてボールを奪うために、サトシが陰で貢献している選手であることを証明してくれたのがGPSデバイスで取得したデータだった。

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

データが示したのは小さな司令塔の貢献度

GPSデバイスで取得したデータが示すサトシの数字は、とても興味深いものだった。心拍数は常に190近くに達している。足が遅いせいか、時速24km以上で走るスプリント数はほとんどない。だが、走行距離はチーム２位の約9km。70分の試合で9kmという数字は、90分で行われるJリーグの試合に換算しても、トップクラスの選手に匹敵する値だ。しかも、時速24kmには満たないような中強度の走行距離はチームでも群を抜いていた。つまり、サトシは、足が遅くても自分の持つ能力をフルに使って、誰よりもスプリントしていたのだ。

さらにデータが示したのは、彼の「根性」だった。このGPSデバイスには根性を数値化する独自の項目がある。心拍数が高い状態で、いかにチームのために走ったかを、独自のロジックでポイントとして加算して数値化したものだ。この値がチームでも群を抜いて高かったのがサトシだったのだ。

わたしは以前にGPSデバイスを提供する会社のオンライン勉強会に参加した時に、本田圭佑選手が飛び入り参加し、次のような発言をしていたことを思い出した。

「サッカーはチームスポーツだから、どれだけチームのために走ったかとか、仲間を助けられたかとか、こういう評価軸って、めっちゃ大事やと思うんです。それを数値化したのが、根性という値なんです」。

この日、ファルカオフットボールクラブは35分ハーフのトレーニングマッチを3試合おこなった。何学年かの選手を混ぜながら、目先の勝利にこだわらずに選手を入れ替えて行く。ハーフタイムになるとコーチたちは「勝負にこだわっていこう！」と選手にハッパをかける。１試合目にフル出場し見せ場なく終わったサトシに、小学生の頃と今では、何が変わったのかを質問してみた。するとサトシは、照れ臭そうに、「中１の途中くらいから、いいプレーができるようになって、お父さんが褒めてくれるようになった」と答えた。

なるほど、そういえば、少し前にサトシのお父さんと話ししたときにこう言っていた。

「小学生の頃は、“何で走らないんだ”って、いつも怒っていました。そんな私が言うのもおかしいですが、保護者も我慢が必要ですよね」。

３試合目になり、再びサトシがスタメンで起用された。相変わらず、ドリブルをしても一人では解決できない。だが、次の瞬間、サトシの決定的なパスから得点が生まれた。

チームに主力メンバーが加わり、相手のプレッシャーが分散した。プレッシャーが少し緩んだ中盤でサトシはスムーズに体の向きを作ってボールを止めた。その次の瞬間、彼の左足から繰り出されたパスは、前線に走る選手の足元にピタリとおさまった。彼の心拍数は相変わらず190近くを示していた。私はサトシのこのプレーに、ファルカオフットボールクラブの選手育成が間違っていないことを確信した。

サトシの例のように、選手一人一人の成長に、客観的な数字で気づきを与えてくれるのがこのGPSデバイスの導入の意義なのではないか。再びサトシのプレーに目を向けてみる。サトシが飄々と走っている。表情にこそ現れないが、どこか楽しんでいるようにすら見えてきた。どこにでもいそうな中学生の可能性に光を当てる。そんなデータ活用の今後に期待したい。

ファルカオのデジタル戦略、次の一手

2023年1月、ファルカオは新たに「スピード＆リアクション」システムを導入した。人は情報の8割を視覚から得ると言われている。多くのスポーツでは、「目で観て身体を動かす」ことが重要だ。この能力を幼少期から身につけることを目指して立ち上げたのが、「U-6園児クラス」だ。場所は南栗橋に新しくできた全天候型のスポーツ施設「ファルカオスポーツベース」。遊び感覚で取り組むことができるので、これからスポーツを始めようとしている子どもの入り口としても最適だ。気になったら、体験に参加してみよう。

生きたコミュニティを創造する

「スポーツでコミュニティをデザインする」

　これはファルカオフットボールクラブ（以下、ファルカオ）が考える地域貢献活動の根幹をなすフレーズだ。社会経済の環境の変化により、自治会・町内会・子ども会など、これまでの地域単位・学校単位のコミュニティは希薄化し、また存続の危機を迎えている。そのような中で、地域の新たな担い手として注目したいと感じていたのが、特定の目的を持ったコミュニティだ。このコミュニティの特徴は、より広域的で、かつ共通の趣味や嗜好を持つ仲間が集まり、組織内でのコミュニケーションが非常に活発であるということが挙げられる。

　この生きたコミュニティこそが、地域の力となって現れることがある。その好例となったのが、令和元年の台風19号のときだ。このときは、荒川および利根川の両河川ではん濫危険水位を超え、久喜市は深夜2時に避難勧告を発令した。無論、深夜の行政無線の音は、暴風雨にかき消され、市民の耳まで届くはずもない。このようなときに役立ったのは、スポーツ団体や文化団体などの「生きたコミュニティ」であった。
　深夜2時ともなれば、直接面会することは愚か、電話をすることもはばかられる。かつての地域コミュニティでは、「クチコミ」の舞台は、井戸端会議など直接面会して行われるリアルな場所が必要であった。しかし、スマートフォンが普及したことにより、液晶画面が舞台となり、クチコミが広がっていった。コミュニティに所属するメンバーによって、近隣の避難所の状況がレポートされ、その情報はコミュニティ内から広がり、そこを起点にさらにコミュニティの外にまで拡散されていった。「わたしも避難しなきゃ」と感じた市民が、急いで避難をはじめる。そんな光景を目の当たりにし、コミュニティの持つ情報伝達力の可能性を感じたものだ。

　ファルカオは、サッカーに興味関心がある子どもたちとその保護者が集まる街クラブだ。楽しみながらも真剣にサッカーに取り組みたいという子どもたちが久喜市や近隣地域から集まり、一生懸命にボールを追いかけている「スポーツコミュニティ」だ。2016年に産声を上げた久喜市の小さな街クラブは、ようやく7年目の活動を終えようとしている。
　スポーツの現場では、いまも勝利至上主義が蔓延している。だが、目先の勝敗だけにこだわることなく、地域のため、子どもたちの将来のために地道に活動を続け、多くの地域住民に認めてもらう活動ができれば、ファルカオという組織の持つ可能性は、サッカークラブのそれを超え、広域のスポーツコミュニティとして、大きな価値を創造していくのではないか。

ファルカオスポーツベースの持つ役割

　そんな地域スポーツコミュニティの拠点として機能しつつあるのがファルカオスポーツベースである。現在、ファルカオスポーツベースでは、週末を活用して、定期的にイベントを開催している。イベント開催日になると、ファルカオスポーツベース内の運動スペースでは、ダーツや卓球、バトミントンなどをして体を動かしたり、子ども食堂や炊き出しをしながら食事を楽しむ親子の姿を見ることができる。ファルカオはすでに、サッカーだけではなく、そしてスポーツだけでもない、広域コミュニティに発展しようとしているのだ。
　いまファルカオスポーツベースには、施設がある久喜市南栗橋地区からだけではなく、他の地域からも人が多く訪れている。まだ運営が始まって１年足らずだが、これまでのコミュニティとは異なった広域コミュニティができつつあることに注目したい。

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

応援される、ということ

先日、ファルカオに所属する選手たちが、某テレビ番組に出演する機会に恵まれた。そのときにある子どもがカメラに向かって、こう言った。

「応援よろしくお願いします！」

子どもながらにも、応援してもらうと自分一人では出せないような力を発揮できることがあるということを知っているのだろうか。こうして頼まれた側も、子どものあまりの可愛いらしさに、無条件に応援したくなってしまうのかもしれない。

だが、もし見ず知らずの大人に「応援よろしくお願いします！」と言われたらどうだっただろうか？　子どもに言われるのとは違い、応援しようと思う人はほとんどいなかったのではないか。そう考えたとき、わたしの頭によぎったのは、「ファルカオフットボールクラブ（以下、ファルカオ）の選手やスタッフは、地域に応援されるために、どんな行動をしているか？」という問いだった。きっと誰もが、「誰かに応援をしてもらいたい」という願望を持っていると思う。しかし、いざ誰かに応援してもらいたいと思ったとき、それまでどのような行動をとってきたかが、逆に問われることになる。それが応援してもらうということの本質だ。

日本でスポーツをする場合、その多くは公共施設を使うことになる。わたしたちファルカオも例外ではなく、公共施設を使わせてもらって活動している。だからこそ、少しでも久喜市に対して恩返しができるような活動を行い、また所属する子どもたちが大きくなったとき、「ファルカオって、こんなに地域に貢献していたんだな」って思ってもらえるようなクラブでありたいものだ。

いま時代が求めているのは公共精神

社会課題が噴出する現代社会では、いたるところでSDGsの理念が掲げられている。いかにして持続可能な社会を実現していくかが現代社会の大きなテーマだ。その理念は、学校教育にも落とし込まれ、ついには、公共精神を持った人材が評価される時代になった。一昔前は、勉強を頑張るか、もしくはスポーツを頑張って良い結果を出すことでしか、進路先は決まらなかったが、最近はボランティアなどの社会貢献活動に一生懸命に取り組んだ人材が、大学に進学するケースが出始めている。いま世の中の人材評価の基準が大きく変わっているのだ。

以前にとあるイベントで、「社会貢献活動を行う意味を考えよう」というテーマの勉強会に登壇させてもらったことがあるのだが、名門校のサッカー部に在籍する生徒が、次のような感想をくれた。

「改めて社会貢献活動はやらなくてはいけないなと思った。サッカー選手である前に人だから。人として成長し、そこからサッカーについても積み重ねていきたい」

サッカー選手である前に人。ファルカオの選手たちも、早かれ遅かれ、いつかこの順番に必ず気づく日が来るだろう。だからこそ、ファルカオでの日々は、サッカーを学ぶだけで終わらせず、サッカーから何かを学ぶ場にしてもらいたい。サッカーが上手いかどうかで評価されるのは、人生の中のほんの一瞬なのだから。

FALCAO FOOTBALL CLUB SAITAMA SINCE 2016

楽しむなら全力、だろ？

無料体験受付中

育成方針

感情を表現する力を身につけ
公共精神と挑戦し続ける心を
育む。最高の仲間と共に・・・。

ファルカオFC久喜

選手・スクール生（小学生）募集中

www.falcao.jp

スクール　選手コース　体験申込

場所　久喜市内（鷲宮運動広場・栗橋小学校ほか）

料金　選手コース：年会費7000円／月会費1・2年生 7000円 | 3・4年生8000円 | 5・6年生9000円
※各学年とも月会費+3500円で通い放題プランへ変更可能。
スクール生：年会費7000円／月会費1スクール4400円　2スクール7700円

スポンサー様　Life Communication 株式会社ライフコミュニケーション　フジハウジング ずまいの相談窓口　eco 株式会社エコグリーン開発　KATARU

発行元：一般社団法人ファルカオフットボールクラブ　〒349-1117　埼玉県久喜市南栗橋4-17-1

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION